



1980年(昭和55年)

1月号(No.415)

社団法人 日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価一部 150円

目次

- 昭和54年度年次晩餐会開かる……………(1)
- '79年後半のヒマラヤ(片山全平)……………(2)
- アイス・アックスの原型……………(3)
- 図書紹介……………(4)
- 『うちなる山々』『ヒマラヤ紀行』
- 『アルプスに光みなぎる時』
- 『登山史の発掘』『泉を聴く』
- 報告……………(4)
- 上高地山研だより 山研運営委員会
- 第22回紅葉会 静岡支部
- 忘年会兼清掃登山を実施
- 自然保護委員会
- 東西南北……………(7)
- 山水会例会より
- 缶岳標識塔建立
- 会務報告・ルーム日誌・会員移動(9)(11)
- 図書受入報告・関西支部図書室小史(10)
- お知らせ 指導委員会・図書委員会(9)
- カット/宮下啓三

▶日本山岳会事務取扱時間
月、火、木、土曜 10時～20時
水、金曜 13時～20時
日曜・祭日は休み

▶図書室開設時間
日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

昭和54年度年次晩餐会開かる

期待されるチョモランマ登山計画

恒例の年次晩餐会が十二月一日(土)午後六時から、新宿・京王プラザホテル四階・花の間におい



中田富山支部長の音頭による乾杯

て、全国から二八七名の会員が出席して開かれた。会場には開会に先だって、例年どおり簡易バーも設けられ、また図書委員会の協力による「この一本展」も併設されて参会者の関心を集めた。

会中は島信一理事の司会ではじまり、最初に西畑会長から会の現況報告があったのち、毎年若い人の入会により、会員が漸増傾向にあることは好ましいことだが、一方で物故会員十四名を数えたことはさびしく悲しいことだと述べ、物故会員の紹介ののち全員で黙とうを捧げた。

続いて会長から会の事業の現況報告がなされ、最初

に学生部が派遣したキシトワール・ヒマラヤ遠征隊(伝田隊長外九名)によるブラマー、シックル・ムーン両峰の登頂成功が報告された。

二番目に、現在日本山岳会が進めている大きな事業の一つである中国側からのエヴェレスト、いわゆるチョモランマ登山計画について、その計画のあらましおよび先に派遣した偵察隊の帰国までの一連の経過報告が行われたほか、今後のスケジュールについても若干触れられた。本隊は'80年二月に出発の予定であり、五月中旬には我々に成功の報を伝えてくれるものと期待していると述べた。

三番目に会長から、このたび前会長の今西錦司氏がめでたく文化勲章を受章し、同じく会員の桑原武夫氏が文化功労者に選ばれたことがあらためて報告された。

続いて会長から本年度の名誉会員の推挙が行われ、佐々保雄、島

田巽、水野祥太郎、佐藤久一朗の各氏にそれぞれ名誉会員章が授与された。また本会入会后、満五十年に達した橋本晋七郎(会員番号一〇一六)、今西錦司(一一一七)、片桐盛之助(一一二六)、西畑栄三郎(一一三六)の四氏に永年会員章が交付された。そして名誉会員を代表して佐々保雄氏から、また永年会員を代表して今西錦司氏からそれぞれ別掲(要約)のおとり挨拶があった。

このあと富山支部長中田清兵衛氏の乾杯の音頭で会食、歓談に移った。一年振り顔に顔を合せた古い会員など話題のつきない親睦風景があちこちで見られた。歓談の間に、先に帰国したチョモランマ偵察隊長の斎藤惇生氏から偵察の経過報告、田中薫氏から自己の会

員番号四四四番についてスピーチがあるなど歓談は続き、なごやかな雰囲気の中に午後八時すぎ散会した。

・佐々保雄名誉会員の代表挨拶
名誉会員だとの知らせを聞いて実は驚いたような次第だ。他のお三方は会のために多大の貢献をされた方々であるので受賞は当然のことであるが、私はそのような記憶はちっともない。

山登りは中学校の末頃から始めたが、しかしそれは激しい山登りではなく、のんきに、気ままに、事情の許すかぎり好きなことをして登り続けてきただけのことである。それがどのような形で日本山岳会に貢献したかは疑問であるが、今後もやはり登り続け、考え続け、そして不名誉な会員にならないような生涯にしたい。

この機会に、今後どのように会のために尽すかをよく考え、できるだけの努力をしたいと思っっている。このことは他のお三方も同じことだと思っ。

・今西錦司永年会員の代表挨拶
永年会員章は、仮に二十歳の時に入会しても七十歳にならないともえない。このようなものをもらうと嬉しいような、また一方、お迎えが近いような気もする(笑)。

山をきりぬぎ
山頂に帰る

そこで会員諸君に言っておきたいことがある。

昨年作った「一千山登山のしおり」のなかで、私は南アルプスの鳳凰三山の最高峰を地蔵岳と書いてある。これについてある人から照会があったので、古い五万分の地図を出して確かめた。印刷では観音岳になっているが、私はそれを消して地蔵岳としてある。その根拠は、当時の高等学校山岳部など登山する者の唯一の案内書であった「山岳」によったのである。

その頃鳳凰三山については、辻本満九氏、鶴殿正雄氏が関心を寄せ、山名などの由緒をくわしく調べたうえで「山岳」に発表したものだ。しかし当時の陸地測量部は大変横暴で、地図は軍が作るものであるから勝手に名前をつけてもよいと、辻本氏などの記事を無視して名前をつけたものもかなりある。誤りを犯したのは、今の国土地理院ではなく、昔の参謀本部の陸地測量部である。

日本山岳会として、これを黙認してよいかどうかという問題になると思う。また最近、本会がそうそうたるメンバーが、監修やら何やら名前だけ出してこのような誤りをそのまま踏襲しているし、また年輩の会員もこのようなことに驚いていない。我々の先輩の辻本、鶴殿両氏が大変苦心して地名を集めてきて「山岳」に発

表しているのに、それを全然読んでもいない。私は今ここで直さなかつたら、我々の時代の恥になると思う。登山人口が増加し、市販のガイドブックや地図類が氾濫してますますこのような誤りが広がっている。悪貨が良貨を駆逐するのはこのことかと思う。

皆さんのなかにご賛同の方がおられるなら、私は国土地理院に乗り込んで行って、責任者に会って、誤ちは改むるにはばかることなからであるから、この根本を正してもらいたいと言いに行ってもよいと思っている(拍手)。ご賛成を切にお願いしたい。(記録・松家晋)

新名誉会員紹介

佐々保雄氏 明治四十年(一九〇七)三月生、札幌市出身、第二高等学校(仙台)を経て昭和五年東京大学地質学科卒、北大助手、助教となり昭和十九年理学博士、二十年教授、四十六年退官、北大名誉教授、昭和五十三年勲三等旭日中綬章受章。

二高山岳部時代先輩の木暮理太郎、沼井鉄太郎氏の知遇を得、その紹介で本会へ入会、高校時代は飯豊山塊その他東北の山々を、昭和五年北大に移ってからは北千島、樺太、日高の山々を登り、朝鮮冠帽峰、台湾の山々、更にシエラ・ネバダ、アラスカ等々足跡は広い(以上は「山」三八七号に詳

しい)。また「山岳」と会報への寄稿が少なくない。

大正十五年(一九二六)二月本会入会、会員番号九六九、昭和五十一年十二月永年会員。永く札幌に在住したため役員にはならなかったが、長期に亘り会に協力した功績は少なくない。

島田 巽氏 明治三十八年(一九〇五)一月生、東京都出身、昭和二年慶大政治学科卒、朝日新聞に入社し欧米部長、ロンドン特派員、論説委員、論説副主幹、ジャパンクォーター編集長を歴任、昭和四十一年人事院人事官、五十二年退官、昭和五十年勲一等瑞宝章受章。

少年時代から登山を始め、殊に山岳図書に親しみ、英米の山岳図書に造詣が深い。著書に「ふだん着の英国」(昭和三十年刊)、「山・人・本」(昭和五十一年刊)があり、訳書にヒラリー「わがエヴェレスト」(松方氏との共訳・昭和三十一年刊)、エヴァンズ「カンチェンジュンガ―その成功の記録」(昭和三十二年刊)があるほか、「山岳」と会報への寄稿も極めて多い。

昭和五年(一九三〇)九月本会入会、会員番号一二二七、多年理事、評議員をつとめた「山岳」編集、図書、図書展覧会、図書編集刊行、書評、自然保護等の委員として尽力した功績は大きい。「山岳」と会報のために綴られた

'79年後半のヒマラヤ

片山全平

79年カラコルムおよびポスト・モンズーンのネパール・ヒマラヤの総まとめでは、ラインホルト・メスナーのK2(八六一一m)での活躍と西ドイツ隊のエベレスト(八八四八m)十三人全員登頂ということになる。メスナーは、みずから高唱する「スポーツディング・アルピニズム」を実践、ミカエル・ダツハー(七七年)ロイツェ無酸素登頂)とともに五日間の南東稜速攻に成功したが、この際も無酸素、ポーターなしの鮮やかなものであった。ナンガ・パルバット(七〇年)、マナスル南壁(七二年)、ヒドン・ピーク(七五年)、エベレスト(七八年)に続くこの軌跡は類を見ない。フランス隊がこのあとを追い、ロード・ピークで速攻を果した(七八年)ヤニック・セニエールが頂上をうかがったが、十月に入ってからシーズンオフの荒天のため断念している。

た。一九五八年の英初登頂(南西稜から)以来の第二登で、北西ドイツ隊が二回試みたが失敗しており、高度六五〇〇mの三百mの岩壁と頂上直下の二百mの岩峰がそのルート上の障害となっていた。同隊は八月二日、大谷隊長と山下松司隊員がこれらを克服して成功した。外国隊にも高く評価された。

このほか七千m級では、シア・カンリ(七四二二m)のカラコルム五大氷河学術踏査隊(林原隆二隊長)、ラトック第一峰(七一四五m)の京都カラコルムクラブ(高田直樹隊長)、プマリキッシュ(七四九二m)の北海道岳連(佐々木孝雄隊長)、テラムカンリ(七三二二m)の弘前大山岳部(花田澄人隊長)などがある。

西ドイツ隊のエベレストはゲルハルト・シュマッツ隊長が指揮した。十月一日に五人、二日に八人と二回に分かれて登頂したと伝えられている。しかし隊長夫人ハンネローレとアメリカの登山ガイド、レイモンド・ジュニットが疲労死したという。シュマッツ夫妻の「おしどり登頂」は悲劇に終わった。

ポーランド、西ドイツの合同ロイツェ(八五一一m)隊(アダム・ベルケウスキー隊長ら

山岳書の書評、紹介だけでも夥しい量に達する。

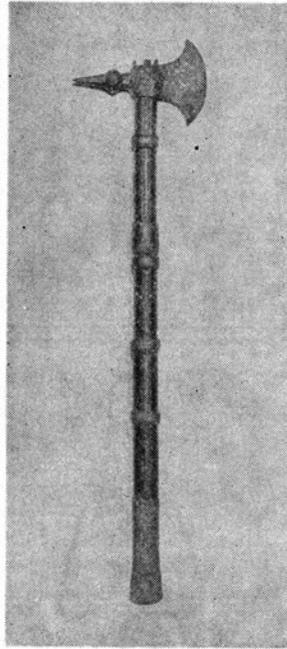
水野祥太郎氏 明治四十年(一九〇七)二月生、神戸市出身、昭和五年大阪医大卒、阪大講師、大阪市立医大教授、大阪市立大医学部教授、阪大教授、川崎医大教授、同学長、阪大名譽教授、医学博士。昭和三十三年大阪市民文化賞受賞、五十二年勲三等旭日中綬章受章。

大正十四年RCC創立会員となり槍、穂高、錫杖、劍岳などで岩登りにはげみ、また同時期氷ノ山、白山、奥美濃などで山岳スキーを実践・研究した。昭和四十五年阪大P29登山隊長として初登頂に成功した。著書に『岩登り術』(昭和八年刊)等がある。

昭和五年(一九三〇)十一月本会入会、会員番号一二五九、関西支部の草創期から支部のため尽力し、戦後関西支部長、評議員をつとめた。

アイス・アックスの原型

——周布光兼氏より寄贈される——



佐藤久一朗氏 明治三十四年(一九〇一)三月生、山形市出身、大正十四年慶大経済学部卒、満洲国本溪湖特殊鋼等を経て昭和二十七年山崎社を設立代表となる、四十六年キャラバンと改称。

慶大山岳部員として活躍、大正十一年榎有恒氏らと積雪期槍ヶ岳登頂、大正十三年前穂高北尾根、屏風岩登攀、昭和四十年代にも穂高で岩登りを続け、七十歳のころアイガー東山稜、マッターホルン、モン・ブラン等に登る。

ウェストン師、小島烏水、木暮理太郎、藤木九三氏らのレリーフ製作、本会の『山日記』『山岳』会報等のカット、記念品等の図案、図書の装幀など永年にわたって作製した点数は夥しい数に達する。

昭和十一年(一九三六)二月本会入会、会員番号一六三〇、評議員、旧東京支部役員として会務に尽力した。

(望月)

*

十二月一日京王プラザ・ホテルで年次晩餐会があったが、後藤幹次さんとお会いするため少し早目に会場へ出かけたところ、周布光兼氏が古めかしい斧を手にしてそばへ来られた。「山崎さん、これは何でしょう。もし登山で使われていたものなら会へ寄贈します」といわれた。見ると長さは六、七十センチの手斧で、四ヶ所に鉄の輪がはめられ、先端の石づきの部分は平らになっていて、これも刃がついておりずしりと重い。

写真のように一見武器のようではあるが、これはごく初期のアイス・アックスに違いないと、私は直感した。喜んでルームへ寄贈していただくことにしたが、これは周布氏の祖父公平氏(大正十年歿、枢密院顧問官、男爵、ベルギー、ドイツ、イタリヤ、フランス、イギリス大公使を歴任)が、明治二十年(一八八七年)以前にヨーロッパに滞在していたころ手に入れられたもので、これまで周布家に保存されていたものだといふ。入手経路や時期ははっきりしないが、光兼氏が山好きだといふので譲られていたそうである。

ヨーロッパ・アルプスで使用された初期のピッケルについては、ウィンパーの「アルプス登攀記」の中の、ペンネンヤクローの手にしているもの(一九三六年第六版の五十四ページと百三十五ページ)

(二十二)は、十月四日と九日の二次に分かれ四人ずつが登頂したが、第一次のハイシリッヒ・ツィグムント、ジェティ・ククシカは無酸素だった。三高峰を七週間内で登る計画だったダグ・スコットの無酸素エベレスト登山は断念した。

このスコットとともにブレのカンチエンジュンガ北稜に初登はんしたピーター・ボードマンら五人は、ガウリサンカールの南峰(七〇一〇m)に南稜から登頂したが、主峰(七五〇〇m)までには到らなかった。

日本隊では、カモシカ同人隊(高橋通子隊長ら十七人)がダウラギリ第二峰(七七五〇m)、第三峰(七七一五m)、第五峰(七六一八m)の三山縦走に成功した。十月十五日、第二峰側から小松幸三リーダーら五人、第五峰側から小椋成人リーダーら二人が同時に縦走を開始、第

三峰と第五峰のユル(約七二〇〇m)でドッキングし、十六日に両隊とも反対側に抜け出た。一山一隊という従来の形式から脱皮した新機軸として注目される。隊員の平均年齢も二十六歳、しかもヒマラヤ経験は、小松、小椋の第四峰登頂(七五年)ぐらいのものであった。

岡山大山岳会(大森武生隊長ら八人)はガネット第二峰(七一五〇m)に十月十九日、小倉英郎とシェルバが、さらに二十日にも小倉のほか、北原孝、横尾信がそれぞれ登頂した。岡山大隊はダウラギリ第五峰の初登頂の実績を持つ。

冬季エベレスト登山は、ポランドがすでに開始しており、ついで明年冬は植村直己とメスナーが単独で、南東稜と西稜からそれぞれ登頂を目指している。ネパールの政府の許可は植村には一月九日におりた。

ジ)はよく知られている。しかし周布氏の所持されているものは、それよりさらに以前のものであることは確かである。

家に帰って調べてみたところ、Cunningham and Ahney の「The Pioneers of the Alps」の第八章「Ice-Axe and Rope」にその説明があった。私の所持しているのは一八八八年発行の第二版だが、それには次のように述べられている。

「十八世紀の終わりから現世紀(十九世紀)の初めにかけて使用されていたアイス・アックスの型はほとんど船大工の斧と同じものであった。カモシカ猟師も氷河を横断するとき、足場切りのために、息子がシャレーの薪を切るのに使っていたのと同じ道具を用いていた。柄の長さは大体二フィートで、身体のベルトへ手軽にさせ

るようになっていた。アルバイン・ジャーナルの各巻のクロス表紙に画かれているガイドはこの種のアックスを描いたものである。クリスチャン・アルマーが以前のアックスについて語っているとこゝろでは、彼のシャレーの納屋から一本のピックを見つけたが、それは一八五四年以前オーバランド全体で用いられていたもので、そのころからちゃんとした登山が始まったということである」

同書の四十二ページ対には初期のピックルの図が九つ出ているが、船大工のものまでは載っていない。

周布氏のアックスは、まさに船大工の使っていたアックスで、日本ではまずお見にかかることのない貴重品である。登山の資料としてもまことに重要なもので、長く会に保管したいと思う。

周布氏の御厚意に深く感謝したい。(山崎安治)

写真はそのアイス・アックス。長さ七〇センチ、アックスからピックの先まで十七・五センチ、アックスの刃渡り十一センチ、重量一・三キログラム。

報告

上高地山研だより

上高地の山研は、去る十一月十一日(日)に閉所し、管理人の津村夫妻も元気に下山いたしました。今年の上高地は天候不順で、夏



図書紹介

『うちなる山々』

中野 孝次著

「岳人」に連載したものをまとめた一著、書名が示すように、山をめぐるの思索で、著者の内面風景が語られている。

人間には「自然の中で生物としての自分を確認せずにいられぬ衝動をもった人種」と「都会の複雑な人間関係のなかで泳いでいる方が快適な人種」との二種があって、著者は「平穏な日常の連続と人間関係のややこしい持続が耐えがたく、たえずそこから突き出していかずにいられぬものがある」から前者に属しているとして自己規定している。

こうした著者にまず親近感をおぼえる読者は多いかもしれない。そして、なぜ前者に属するのか、前者に属するとはどういうことなのかを、ヨーロッパ中世の生活への憧憬、ジャヴェルの「一登山家の思い出」、さらにはブリューゲルの絵、西行や三好達治ほかの作品の引用など、独文学者、文芸評論家としての著者の思想生活を背景に熟っぽ

く語っている。執筆の動機には「ジムナスチックになりつつあるらしい」近頃の登山への反感があるとのことだが、ジムナスチックな山登りに「うちなる山々」が存在しないとはいえないし、山の本はすべて「うちなる山々」を語っているともいえるから、これは内面風景を描くことへの一つのエクスキューズないしは、はにかみと受けとっておくほうがいいよう

だ。それはともかく、本書では、いたるところから病める現代とそこに生きる苦渋がうめき声を発している。そのことに全面的に首肯できない読者でも、しかし健康な自然感への著者のつよい憧憬、「このままではもうやっていけない」という著者の思いには深い共感を覚えるだろう。その内面の衝動に動かされて著者は信州の一隅に山荘をつくるが、十年のちその山荘をたたんでしまう。そこもまた

自然が失われたからとされているが、失われたものは自然だけだったのだろうか。なじみにくい箇所のある「わが月歴画」の章よりも、この山荘生活を描いた「山小屋の雪」の章で素直に著者の内面風景に触れることができるから、この第二部に相当する部分に中心をおいた新しい作品を期待したい。それは、「森の生活」(ヘンリー・ソロー)の日本版のようなものになるだろうから。

昭和五十四年五月二十四日発行
東京新聞出版局刊 二〇〇〇円
(大森久雄)

『ヒマラヤ紀行』

J・D・フーカー著
薬師 義美訳

J・D・フーカーがシッキムと東部ネパールの山城を探索したのは一八四八、四九年だが、それはわが嘉永一、二年に当り、米使ペリーが浦賀に来航する四、五年以前の古いことである。また欧州アルプスの登山史を開いても、一八四〇年代は、アルプスの巨峰がようやく登られた、ごく初期の時代に相当する。

これらのことを頭において、フーカーの探索を振りかえってみると、それは本人の意図あるなしにかかわらず、文字通り先駆者の業績であったという感が、ひとしおするのである。しかも、その成果が「ヒマラヤ紀行」にまとめられ、その内容や地図が早期の探検者たちに大いに活用され、役立ったことは、ヒマラヤ探検史上でもつとによく知られたことであつた。

しかしながら、年月が経過して新しい文献、例えばフレッシュユアイルドの「カンチエンジュンガ一周」とかパウアーの「ヒマラヤに挑戦して」のようなものが現わ

れると、フーカーの方はしだいに古典として位置づけられ、本の題名は誰にもよく知られているものの、具さに読む者は漸減していったのではないかと思われる。ひとつには上下巻で九百ページにも達する分量のせいでもあった。

このたび会員薬師義美氏によって、この浩瀚な古典が訳出刊行された。あとがきによると、四年余の歳月を費したものとあ

る。それだけに、よくこなれた読み易い訳となっている。何と云わねばならない。巻末に著者のことなどにつき十三ページにわたって訳者の解説があるが、訳者の学殖をうかがうことのできる見事なものである。また本訳者にたいしては、出版社の良心的協力がなされたという点も、一言しておきたい。

印刷、製本等が現在望みうる最高のものであるばかりでなく、原書初版から複写された原色版の口絵も実に見事であり、挿入された数多くの銅版画、地図等は、極めて鮮明に印刷されていて、原書にまさるともおとらない。愛書家の書架に加えるに足る立派な出来栄であること、心から喜ぶものである。ヒマラヤ文献の邦訳について



(山研運営委員会・高本)

54年度	53年度	
281	269	会 員
418	497	非会員
42	34	小学生
10	15	小 人
751	815	計

利用者状況

の登山、秋の観光シーズンと雨や台風に見まれ、特に十月の利用者は昨年の半分以下となりました。
また、燃料のプロパンガスや灯油の値上がり、設備、修理費もかさみ、現地での支出も昨年度の倍にはね上っております。今後共、会員皆さまのご利用とご協力を切望いたします。

概観すると、従来は巨峰の初登頂記(主に新刊の)が圧倒的に多かった。過去二十年ぐらいたくからでもあった。本書のような古典が刊行されるような時代になつたことは日本におけるヒマラヤ探究が、一段と厚味を加えてきたことを意味し、その点でも本訳書の刊行された意義は少なくない。
(A判本文五六ページ、写真二ページ、原色版口絵一二ページ一九七九年八月一日、白水社発行、定価五八〇円)
(望月達夫)

『アルプスに
光みなぎる時』
近藤 等著

この本は一九七五年から一九七八年まで、著者が渡欧した際に登った、夏のヨーロッパ・アルプスの紀行をまとめたもの。同じ紀行集「シャモニの休日」以来四冊目のものである。

ヨーロッパ・アルプスについて造詣が深く、しかもなお現役と同じに数多く高度の登山をおこなっている著者の紀行なので、山の選択、ルート、の叙述、山の描写には力があり、山に対する著者の感受性の豊かさは青い空とか氷雪の白さを常に読む者に密着させてくる。たとえそれが悪天候での登山だとして

も、並行して語られる解説や、飛び交う雲の切れ目に青空を感じさせる。これは著者と山行を共にしたレビューファなど多くの岳人の持っているもののだろうかとも思う。

私はたまたま昭和18年の会報18号で出陣学徒を代表し「生還を期せず」と挨拶した近藤氏を知った。氏と共にそこに集った出陣学徒の大半が未帰還となつたに相違ない。それからもう40年近い歳月が流れた。ヒマラヤの高峰は次々と登られ、人目をひく山も壁も少なくなつた。山登りの多様性を説き将来の登山に希望をつないだり、山登りを病気の一種だと説明する人もいる。だが本当に山登りは存続するのだろうか。かたくなに自分の山登りを守り通した人々が次々と去つて、日本の山に飽き、ヨーロッパ・アルプスに飽き、ヒマラヤにも飽きて、登山における価値の動転を将来に予測されるような状態に放り出された者が期待するものは、自分たち本来の山に自信をもって立ち戻れる力を与えてくれるもの、大きな価値の動転にあつてもなお山に吸ひ寄せられた先人たちの摺りだものであるに違いない。

この本を読み終え、私はヨーロッパ・アルプスは美しいと思つた。日本の山をこのように美しく外国に語り伝える現代のウエストンはいるのだろうかと思つ

たりもした。
終りに、この本で紹介されている山の美しさにひかれ、著者のような技術を持つと錯覚した登山者が、安易に同じ山に取りつかぬよう警告したい。例えば第三部にあるブリュームリスアルプホルンの北西稜を著者は「簡単にやさしすぎる」と表現しているが、これは著者だから言えることで他の者には通用しない。昨年夏、カンデルシュテック山案内人組合はこの北西稜での死者が10名に達し、とうとう新しくルート標識をつけたと、昨年SACの月刊誌「Die Alpen」10月号は第一面で報じている。経験のあるアルピニストも、北西稜にある通称プレートと呼ばれる地点ではルートをまちがえ滑落しているからである。
昭和五十四年八月三十一日刊
東京新聞出版局発行 定価一八〇〇円
(岡沢祐吉)

『登山史の発掘』
山崎 安治著

登山史の解説をやらせたら右に出る者がいない山崎安治氏の新著は、その点において期待にそむかず、内容の充実した読みごたえのあるものであった。

著者には、本書以前に「剣の窓」「穂高星夜」「山の序曲」「日本登山史」があるから、日本の登山の歴史については概ね語りつくされていたのかと思うと、まだまだ書

き足らなかつた部分があんなに あつたのかと驚く。そう言えば、本書に収載されているのは、南・北・中央アルプスに限られており、まだ発表していない上越や、東北、北海道、奥秩父等の日本の代表的な山々にも視点と対象を拡げていけば、この著者に残されている使命は限りなく大きい。

本書のなかで著者は、従来伝えられていた登山史の誤りと思われる点を次々に訂正している。一例をあげれば、芥川龍之介の槍ヶ岳登山の年月日の考証、地藏岳オベリスクの登攀、前穂高北尾根四峰側壁の登攀日などがそれであるが、訂正のための検証には、人に知られぬ苦心と努力が払われている跡がうかがわれ、敬服に値いするところである。

また、登山関係(単行本、雑誌、報告書類)以外の文献に記載されている山の記事などは、限られた人を除いて眼にふれる機会がないものである。著者は眼を皿のようにしてそれらの文献記事を探しだし、抄録して紹介している。のみならず、発表されていない登山記録については、正確を期するため当事者に直接面接してヒヤリングを行っている。未発表記録の欠落を埋めて科学技術の世界では、各分野

第22回紅葉会報告

静岡支部

去る十一月十日夕天城山麓(伊豆)の国民宿舎で懇親会を持ち翌十一日仁科峠から天城峠までの山歩き、夕刻修善寺駅で解散いたしました。縦走途中、怪我人を一名出してしまいました。参加者および支部員の協力が適切な処置で大事に至らず、不幸中の幸でした。お怪我の一日も早く快癒されますよう祈っております。

また参加者の御協力に対して改めてお礼申しあげます。

(参加者) 小林重一、久保孝一郎、久保ツルエ、神奈川甚吉、鶴岡元之助、斎藤桂、望月達夫、富田郁夫、山田哲郎、田中仲治、川北仁、山崎健、近藤恒雄、青木昇、砂田定夫、進藤波男、梅野淑子、木村俊博、松本熊次郎、芳野菊子、松本慎太郎、川上光久、木下是雄、網藏志朗、隈部恵子、近藤緑、杉山都子、高沢英夫、同夫人、山本朋三郎、牧野衛、水野公夫、山田恵三、久保田保雄、安間荘、望月福次、坂井八郎、渡辺勝宏、仁藤敏彦、西郷正郎、稲垣一郎、滝田博之、中山啓司、川端信治、山口亮。以上48名 (山口亮)

紅葉会偶感

昭和五十四年の紅葉会は、十一月十日が終日雨で、翌日の天候も

別の世界中の研究データがコンピュータに記憶されていて、たちまちこれを引き出す仕組みが既に出来ている。さしずめ山崎氏など登山史データのコンピュータの代わりを果たす存在であろう。

本書は大別すると「登山史の発掘」として、各務良幸氏のモン・モディ登攀、厳冬期および積雪期の穂高の初登記録、羽尾根の記録など。その他、明治中期の二つの飛騨山脈踏査の資料紹介は興味深い。次が「山の履歴書」で、日本アルプス命名の由来、使用の経過が詳述されている。更に南・北・中央アルプスの主要なピークの登攀史が刻明に整理され、最後に「山と人」で六篇の論文、随筆があつめられている。

日本山岳会創立以前、明治三十七年に欧州アルプスを探訪した中目覚氏の事蹟を調べた一文など読者の眼をひくことだらう。言うまでもなく山崎氏は大変な読書家である。本書をまとめるにあたって参考にした文献資料の類は、おそらく百冊を越えるのではないかと想像される。一覧として巻末にでものせておいてほしかったと思う。また本書には一〇部限定の特製本があることも好書家を喜ばせるに

違いない。

A5版 三〇五頁 一九七九年九月 若溪堂刊 定価二五〇〇円 (織内信彦)

覆刻版

『泉を聴く』

西岡 一雄著

西岡一雄老の処女集『泉を聴く』は、稀覯本とまではいかなくとも、古書市場では入手困難な一冊であろう。かねて加納一郎氏より、老の没後十三周年などに追悼出版を要請されていた。日本山岳会編、大修館版『覆刻・日本山岳名著シリーズII』で、本書は森本次男著『樹林の山旅』ともども、惜しくも選にもれてしまった。それではというので、関西在住のJAC会員はじめ関係者が協力し、地元出版社から昭和53年秋に『樹林の山旅』上製八〇〇部限定、さらに昭和54年秋には、特製五〇部限定本を上梓した。

本書は地元サンブライト社覆刻企画第二弾だが、原著の完全覆刻に加え、念のいったことに原本の正誤表までついている。もっともあまりひどい誤植は、覆刻に際し訂正してある。特筆すべきは、諏訪多栄蔵編『回想—西岡一雄』が、付録として別冊になっており、ともに美麗貼函に収まっていることであろう。いまここで、『好日山荘』創設者

西岡老と、名著のほまれ高い『泉を聴く』の内容について云々する必要はなからう。それよりも、付録の『回想—追悼篇』をみると、西岡一雄頌、深林と時雨(石塔尾根)／諏訪多栄蔵。忘年淡交／新井清。わが師・西岡一雄／大賀寿二。漂泊の旅旅人／森本次男。西岡老の遠近／加納一郎。回想の秩父一詩二篇／永楽孝一。『泉を聴く』について／諏訪多栄蔵。賀状一束／好日山荘主人。逝去通知、弔辞などがある。さらに『遺稿篇』としては、『峠ふたつ／青崩峠・保福寺峠』、『宮川・父が谷および大和谷』、『隣虚亭雜記』の三章があり、豊富な口絵写真の数々とあいまって、帯封のPR口上ではないが、西岡一雄研究の好資料となっている。

付録口絵カラー写真は、『山岳』第五十九年(一九六四)二五三頁掲載の、足立源一郎画伯描くところの、壮年時代の肖像画で、ご息女秘蔵のところをとくに借用したものである。さきごろ、鎌倉で美術館学芸員をしておられる足立朗氏は、父上の数少ない遺作中の一点をご覧になるべく上洛されたが、その保存状態のわるさをなげかれ、完全に修復した上であらためて返納されることになった——というエピソードも、本書復刻がとりもった後日譚であり、この機会にあきらかにしておきたい。

また西岡老のライフワークとなった『木曾古道の研究』原稿は、老独得の出版社泣かせの金釘流達筆のため、かねて諏訪多さんが全文清書されていたが、あまりにも分量が多く、その内容も専門的にすぎるため、今回もまた陽の目をみる事ができなかった。

ともあれ、本書の復活をもっとも喜んでいただけるはずの、加納さんが長逝されてしまったのは、この企画にたずさわった一人として最大の痛恨事と思う。

ところで昭和54年10月10日、『中公文庫で』『泉を聴く』が刊行されているが、こちらは東京・好日山荘の海野治良氏が解説を書かれています。新仮名づかいだけに読みやすいが、本会々員諸兄姉には、あえて覆刻版をおすすめしたい。昭和九年・朋文堂版の完全覆刻、クロス装、B6判、本文三一〇頁、上製本。付録(別冊)『回想—西岡一雄』諏訪多栄蔵編、B6版、本文一六〇頁、写真多数。昭和54年11月1日、サンブライト出版(京都市中京区河原町竹屋町上ル)発行、四〇〇〇円。尚、『樹林の山旅』上製本、特製本とも在庫僅少ある由。(阿部恒夫)

危ぶまれたが、十一日は思いがけない秋晴れに恵まれて、三十数名の会員が心たのしく仁科峠へ猫越岳へ天城峠と辿って、ほかに誰も人に会わぬ静かな行程を歩き、新雪の富士をはじめ南アルプスや伊豆の西海岸などの展望をほしのままにすることができた。いつものことながら、静岡支部長の山本朋三郎さん、支部の会員諸氏には非常なお世話になり、参加者全員一人として感謝しない者はないと思われる。

今回のコースは、僅かながら台風等による倒木と小崩壊があったとはいえ、大勢で歩くのに決して無理なものではなかったが、不幸にも猫越峠と滑沢峠の間で、一会員が転落するという事故がおこった。あまり大きな怪我でなかったことは、まことに不幸中の幸であり、また応急処置が良好で、その後も支部の屈強な若い会員が、交代で背負っておろすなど、支部長以下献身的な万全の努力をして下さり、また同行の会員も協力されたお蔭で、極めて短時間のうちに会員である外科の田辺恵造先生(富士市)の許まで搬送できたことも最善であった。負傷者のその後の経過も良好ときている。

ただ私としては、どんなにやさしいコースでも、山が山であり、人が人である以上、山での事故はおこり得るものだという、極めて当たり前前の現実を、まざまざと見せ



山水会
例会(講演会)より

・わが登行 講師 三田幸夫氏

山岳会の集りは四角張らないというのが特徴です。思い出の山それはなんといっても穂高でしょう。大正年代は何時も穂高に集結してました。私もそのうちのひとりとして情熱を燃やしました。中でも雪の穂高は特に印象が深くことのほか素晴しかった。また剣、立山も格好な山の一つでした。現在の溜沢は随分と活況を呈していますが、当時見たことのない雪の穂高は一体どこから入山するのか、徳本峠から入るのか、その点はつきりしなかった。

テント、寝袋といった装備には随分苦労しました。今にして見れば馬鹿々々しい位の装備で、仲間と剣、立山へ登行しました。その装備は随分現況と違っていたが、たとえ装備がよくなくても自然の恐しさは今も昔も変りない。交通が発達し装備

が完備でも、山の遭難の後をたない現況は誠に遺憾なことです。遭難には運不運が伴うもの。しかしある程度の危険は避けられるでしょう。

西穂のピークに登った講習会はその一例だった。アンザイレンし登るのは登山の常識。ご多分に洩れずアンザイレンしたことごとなきを得た。その点講習会はよい例であり貴重なもの。アンザイレンすることがめんどくさくても、危険を避けるためにはおきてを守ることだ。

第一回目のマナスル登山のとき、前進基地五〇〇mで隊員の一人が落下した。なんでもないスノーブリッジであったが、かなり深いクレバスだったためアンザイレンしていても落下地点の発見に苦労したことが思いだされる。

遭難をさけるためには必ずアンザイレンすることである。これは忘れることができない一つの教訓である。ロッキー登山の際は殆んどアンザイレンしたものだ。

スイスの登山のときはガイドがクレバスに落下したが、前後でアンザイレンしていたのでごとなきを得た。これはやはりアンザイレンして遭難を免れた一例である。霞沢のような低山を思い出しませんが、どこの山に入っても似ているものが随分あります。年寄りが古い山を語ると笑われるが私たちが

のようにもはや入山不可の場合、なんといつても古い山の話はなつかしいものだ。

考えに依って随分いろいろの登り方があると思う。奇襲登山も一つの行き方。藤島(敏)氏の如き登山こそ幸せな登山だ。

装備一雨具は英国登山家の着衣を輸入した。アザラシの皮の寝袋は完全になめしてなかったので腐った臭いがした。当時は自分で作って着衣したものである。

テントはウインパー型をインド駐在時代に英国から輸入する。グリセードは外国の本で知ったが日本では棒ずりと言っていた。靴(スイス製)の輸入は難しく靴屋で作らせたものであった。

当時山にスキーをけいたいすることは論議的にされたが、反対論者はやはりおそく、輪かんはスキーに押され勝ちであった。当時金具はオーストリアのものであった。

その頃、長谷川伝次郎氏に靴下を編んで貰った記憶がある。猪谷氏(父)は伝次郎氏の弟子で、靴下の研究は本格的であった。ダイジリン時代は長谷川氏に作って貰ったスキーをはいたが随分重かった。長谷川氏は随分変わった存在であった。

出席者 折井 金坂 島田(寛)
片岡 斎藤(健) 菅野 滝川 松家
大野 木村(俊) 斎藤(健) 高田

近刊案内(3月1日予定)

藤江幾太郎・山の画集

<日本の山とネパール>代表作収載



TSURUGI A4変型(215×265) 布クロス特装 箱入
総134頁・カラー32頁、単色16頁 素描32P
面文2編 定 価 6,000円
予約額 5,000円 ハガキ予約受付中
申込先 藤江幾太郎(会員 NO. 7593)
〒177 東京都練馬区東大泉210 電話 03(922)6670

中川(寛) 広羽 渡辺(定) 黒木
坂本(定) 池田(寛) 吉原(道) 坂
倉 進藤 関塚 片岡 河野(寛)
赤津 福井 宇津 勝田 岩堀
鈴木(寛) 浜田 栗原(寛) 坂本
(寛) 沼倉 外二名

・山と健康 講師 辰沼広吉氏
注目の辰沼さんの「山と健康」の講話は生憎降雨がわざわざいし何時もの集り程ではなかった。「一体山登りは健康的なんだろうか」の命題から実例を挙げられ、質問も予定の時間より40分余りすぎ、話は微に入り細に涉った。

つけられた思いである。いままでも本会や支部が主催した懇親山行のようなもの、永年にわたって随分数多く行なわれてきたし、幸いにも事故らしいものはおきてなかったと記憶する。だが、今回のことから、どんなやさしいコースでも、会としては支部としてやる以上は、万一のことだけはしっかり考えておかないといけない、という山登りのごく初歩的な、また基本的な用意を、改めて篤と知らされたのであった。

忘年会を兼ねて

清掃登山を実施

自然保護委員会

日本山岳自然保護委員会では、さる12月15、16日の両日におたつて忘年会を兼ねて、奥多摩御岳一日之出山の清掃登山を実施した。

幸いにして両日とも雲量ゼロの快晴に恵まれ折井副会長、織内信彦委員長はじめ十名の委員が参加した。

一行は前日の15日夕刻、奥多摩・御岳の国民宿舎山楽荘に集合し、定刻の午後6時より忘年会が行われた。忘年会は織内委員長を議長役に、まず同氏の持参したア

激しいボクシングの如きはスポーツといえるのか。またヒマラヤ登山の如きは、高所への登山後の後遺症、酸欠によるボケのあることは確かで、これははっきりと医学の立場から言明できる。

相撲取りの如きは空腹時激しく活動し、その後食べて寝て、無理に体重を増量するという。この事実からスポーツの凡てが必ずしも健康とはいえない。結局健康といえるスポーツは一般のスポーツとして適量にやることだ。ことに寒暖の差の激しい登山は毛細血管を刺激する。寒さは健康と関係がある。南ア、マンゼラ地域の平均気温十度に生活している民族は自然にこれが調節されている。

登山に大切なことは寒さに強くなるトレーニングをすること。この場合寒くならぬような服装によること。震えるようではトレーニングにはならない。高所に居住している住民は高度には強いが寿命は短命である。

山登りでは異常な環境ということを特にわきまえること。高度に適応しないとき、即ち工合が悪くなった場合は直ぐに下山すること。若いものにつられて行くことは問題だ。逃げることで

からは下降線を辿るのだから、適応の限界を知ることである。若いものは低山には興味がないが、ヒマラヤのような高山には興味を引かれる。

ドイツのローレン氏は言う。動物の生熊を観察すれば弱肉強食を知ることが出来る。人間には攻撃の精神がある。即ち若いものは登山やヨットによって攻撃闘争を試みる。

榎氏は登山は自然と共にあることを常に力説されている。山には攻撃(アタック)はない。米国の或学者が榎さんと同じ説を強調していることは注目される。

結論をいうと、年令にはエネルギーの限界があり、この限界をよく認識すること(年寄りの冷水の如きはさけること)。文化的健康とは現在ある環境の中で「力」を造り、自分自身の力を十分知り、健康のため年令に応じた山登りをする。即ち原始的な生活に帰することは健康の一要素である。要は適当に食べ、適当に運動すること。健康の因はインターバル走法、つまり速歩(またはしつぱ走)そしてゆっくりと駆け、また速歩(またはしつぱ走)してまたゆっくりかけるといったことを繰り返す方法で、この走歩行法は健康につながる。(沼倉記)

原 今井(巻) 坂倉 高田 小林 (重) 大野(巻) 中 沼倉

御岳標識塔建立

去る十一月十四日初雪の降り頻る日、ここ馬場島では、午前十時開式予定の塔除幕式を、雪のため、参列者の乗る二台のマイクروبス、乗用車等の一時間余の遅れ、それに前日雨の中で準備した竹、メ縄等が倒れて雪の下になっていたのを、全員努力でどうにかもとどおりにし、午前十一時に、やっと挙行することが出来ました。

富山県において国体が開催された時から、中部山岳国立公園御岳早月尾根馬場島登山口の標識の建設を願って、関係各位に相談してきましたが、このたび漸く上市ライオンズクラブの理解ある寄付金と関係官庁など諸関係者の協力で、見事完成する運びとなりました。

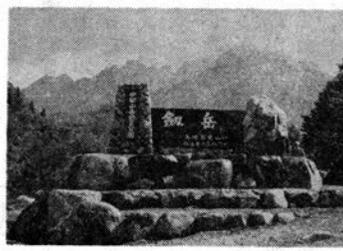
私は職業がこの種の建設を業とするため、当地特産の石材を主とした計画設計をおこない、これを日本山岳会富山支部長の中田清兵衛氏、同支部理事の若林啓之助氏等多くの賛同を得て、各地の登山標識と比べ類のない形で完成した

わが町のシンボル、中部山岳国立公園御岳の峻険な神々しい偉容は、朝夕仰ぎ見る私達や登山する人達に種々な意味で幾多の教訓を与えています。

四年前この場所より一キロくらい奥地の早月尾根取つき口には、「試練と憧れ」と書かれた碑と遭難者の慰霊堂を建立し、毎年開山の儀式では、登山者の平安と目的をとげずに散った諸霊を慰め、現在に至っているわけです。

以上のような次第で、今回の塔の周辺には青少年旅行村、キャンプ場、馬場島荘その他の山荘ができました。こうして「憧れる心に試練あり」と戒めるとともに無事を祈ってまいりました。今後御岳を目指して登る人達は此の標識塔の前に立つ時もまた必ず希望と試練に心を引締められることと信じます。社会に出る若人の苦難の道と御岳を目指す道には、共通した忍耐と努力そして苦楽のあることを悟らしめ、あわせて登山の無事を祈りこの塔を建立した次第です。

(富山支部 浜田文二)



フガニスタンのスライドを楽しんだのち、鍋や山菜料理をつつき、差入れの酒やウイスキーを飲みながら、主として自然保護を話題として始められ、話はずみ延々11時過ぎまでゆく年を惜しみつつ和気あいあいと続けられた。

翌16日は早朝からゴミ袋を用意し、山菜荘を出発し、山荘から日之出山間の登山道並びに山頂周辺のゴミを清掃した。

登山道はちょうど枯葉の下になっけてそれほど目立たないが、ここは奥多摩でも屈指のハイカー達のメッカだけに、山頂付近には多量のゴミが散乱して委員達お知らせ

◎第24回 ススキー技術講習会開催のご案内

これから本格的に積雪期のススキー登山を志す方を対象にしたススキー講習会を企画致しました。ススキーの基礎技術講習と鳥海山周辺のススキー登山を行います。講習は参加者の技術と希望に応じた班編成をし、講師には経験豊富なメンバーを予定しております。懇親の意味を含めての講習会で、男女を問わず参加していただきます。左記の通りご案内申し上げます。

日程 昭和55年2月9日(土) 11日(月) 12日(火) 場所 鳥海山 湯ノ台口方面 行程 2月8日(金) 夜行出発 2月9日(土) 酒田駅前集合 バスにて草津登山口へ、徒歩にて湯ノ台鉱泉入山 2月10日(日) 鳥海山及び周辺部のススキー登山 2月11日(月) ススキー練習を

を嘆かせた。いま普及しつつある「山のゴミ持ち帰り運動」もいわゆる一般のハイカーまで徹底するのはまだまだ先の事だと思われた。

しかし、道々、都岳連・自然保護委員会の看板や頂上直下には立派な焼却炉も設置されているなど、自然保護には地元の人々はかなり力を入れていっているように見受けられた。

午前中の熱心な作業の結果、かなりきれいになったが、時間の関係で切り上げた。それでも道ゆくハイカーたちにはよいPRとなりその点では所期の目的を達成した

しながら下山、酒田駅にて現地解散。 費用 一三、〇〇〇円(宿泊、保険、消費品費等含む)、交通費、食費各自負担。 申し込み方法 日本山岳会事務局で電話にて1月25日まで受付ください。 TEL 02-261-4233

参加者説明会 2月4日(月) 午後7時より日本山岳会ルームにて行います。

◎第11回山岳圖書を語る夕べ 「鳥水の方法」……近藤信行氏 3月13日(土) 18時30分より

◎第8回山岳史懇談会 「大正期のわが山登り」 3月26日(水) 18時30分より 以上いずれもルームにて行い、詳細は追ってお知らせいたします。 図書委員会

会務報告

支部長会議 12月1日午後二時、ルーム 出席者 折井、渡辺副会長、宮下、中島常務理事、西沢(熊本) 亀田(石川) 今西(関西) 中田(富山) 松井(岐阜) 山本(静岡) 大沢(山梨) 小木曾(信濃) 藤島(越後) 中島(福島) 村上(山形) 平野(北海道)

委任 柴田(秋田) 伊達(宮城) 佐藤(岩手) ◎審議及び報告事項 ①チョモランマ登山について

渡辺より偵察隊の行動、特に中国人協力者三名を失った遭難事故に対する処理並びにこのことが本隊派遣には支障なき旨報告あり。本隊派遣についての規模、行動計画併せて隊員候補者選考の基本的方針について説明。

②深田久弥碑建立のこと 山梨支部 大沢 韮崎市観光協会にて同市穂坂町柳平地内に碑建立を計画、その推進のため委員会案(日本山岳会、山梨県山岳連盟、白鳳会、同市観光協会)等の内容で依頼

ものと思う。(小倉 厚) 「参加者」 織内信彦 折井健一 島田巽 国見利夫 沢井政信 関塚真亨 武田満子 近藤緑 小林茂 小倉厚 以上10名

状を受けた。詳細は調査の上で報告する。(同文にて本会にも依頼があった。今後山梨支部を窓口として検討したい)

③富山支部三十周年事業について 富山支部 中田 記念事業として播隆上人の生地に記念碑建立という様な事も考えている。既に記念事業を実施した各支部にも意見を聞きたい。

④支部長会議の在り方について 静岡支部 山本 支部長会議を規程として、定款に組み入れてほしい。(昭和五十一年一月に定められた支部長会議運営内規に依り運営されているが、定款は監督官庁である文部省の指導に依り最少必要事項の定めで実施されている。支部内規を組み入れるとなれば、支部設置、支部長の任期等も定める必要があるののでよく検討をしたい) 以上

12月理事會 12月3日午後6時30分 本会ルーム 出席者 西堀会長、折井、渡辺各副会長、宮下、中島、飯野、中川中村、川上、岡沢、嵯峨野、鈴木山口、高本、菅沢各理事、片岡監事、金坂、大塚、山崎、小原(幹) 各評議員 委任 大森、小倉、高橋各理事 村木評議員

報告事項 ①チョモランマ登山計画の現況報告 (渡辺) 本隊の計画概要がまとまった。 支部長会議について (折井) 12月1日開催、12支部長(代理含む)が出席し盛会であった。 昭和54年度年次晩餐会について (中島) 12月1日開催、二八七名の出席者があった。

ルーム日誌 (54年11月) 1日(木) 会報委員会 5日(月) 集委員会 6日(火) 婦人懇談会 7日(水) 集委員会 11日(日) マラソン大会 12日(月) 図書委員会 13日(火) 婦人懇談会 遭難対策委員会 14日(水) ヒマラヤの博物学小集 16日(金) 科学研究委員会 19日(月) 理事会、評議員会 20日(火) 自然保護委員会 21日(水) 三水会 22日(木) 高所登山委員会 27日(火) 婦懇研究会 今月の来室者四四〇名 会員移動(11月) 改姓 六四三四 後城謙二→藤原へ 除籍取消 七一九四 平石千翠子

図書受入報告

図書委員会

昭和 54 年 4 月～6 月受入 (つづき)

9. 冠松次郎著「溪」中央公論社 1979 (版元寄贈)
10. 上田哲農著「日翳の山ひなたの山」中央公論社 1979 (版元寄贈)
11. ラインホルト・メスナー著 横川文雄訳「エヴェレスト・極点への遠征」山と溪谷社 1979 (版元寄贈)
12. 高田直樹著「続・なんで山登るねん」山と溪谷社 1979 (版元寄贈)
13. 細田充著「剣岳の岩場」山と溪谷社 1979 (版元寄贈)
14. ダグ・スコット著 岡本信義訳「ビッグウォール・クライミング」山と溪谷社 1977 (版元寄贈)
15. ラインホルト・メスナー著 横川文雄訳「大岩壁」山と溪谷社 1978 (版元寄贈)
16. 植木知司著「かながわの山」神奈川合同出版社 1979 (版元寄贈)
17. 鳥賀陽貞子著「心に残る山々」現代旅行研究所 1979 (著者寄贈)
18. 横山厚夫著「新版・登山読本」山と溪谷社 1979 (版元寄贈)
19. 佐内順著「雪山」山と溪谷社 1979 (版元寄贈)
20. 中野孝次著「うちなる山々」東京新聞出版局 1979 (版元寄贈)
21. 国鉄山岳連盟編発行「イランの山々と」1979 (加藤孜氏寄贈)
22. 仙合一高山の会発行「ガンチェン登山報告書」1979 (版元寄贈)
23. 川西山の会発行「厳冬期飯豊連峰完全縦走への道」1979 (版元寄贈)
24. 小林英見著「カシミール・タジクス」久我山プレス 1978 (版元寄贈)
25. 山本光雄著「みずず講の旅」信学社 1975 (清水栄一氏寄贈)
26. 清水栄一著「わが遍歴の信州百名山」桐原書店 1979 (著者寄贈)
27. 立教山友会発行「ヒマラヤ・トレッキング」1979 (版元寄贈)
28. 藤木九三著「雪・岩・アルプス」中央公論社 1979 (版元寄贈)
29. 大森弘一郎著「北アルプス稜線を飛ぶ」山と溪谷社 1979 (版元寄贈)
30. 三田幸夫著「わが登高行・上巻」茗溪堂 1979 (著者寄贈)
31. A. Blackshaw "Mountaineering—from Hiljwalking to Alpine Climbing" Penguin Books, 1975 (購入)
32. Charles Meade. "High Mountains" Harvill Press, London, 1954 (購入)
33. Major H.P.S. Ahluwalia "Higher than Everest" Vikas, New Delhi, 1974 (購入)
34. "Medical Plants of Nepal" His Majesty's Govt. of Nepal, Dept. of Medical Plants, 1973 (購入)
35. Netra B. Thapa "A Short History of Nepal" Ratna Pustak Bhandar, Kathmandu, 1973 (購入)
36. F.A. Collins "Mountain Climbing" John Long, London, 1923 (購入)
37. "Himalayan Endeavour" A Times of India, Bombay, 1962 (購入)
38. 孫慶錫 "That's the Himalaya, Sung Moon Gak, Seoul, 1978 (著者寄贈)
39. Cutis W. Casewit "Montagnes du Monde" Fernand Nathan, 1976 (蒲地辰彦氏寄贈)
40. M. Herzog "La Montagne" Librairie Larousse, 1956 (蒲地辰彦氏寄贈)
41. M. Fantin "Atlante Alpinistico della Groenlandia" Tamasi Editore, 1969 (著者寄贈)
42. M. Fantin "Lhotse '75" Club Alpino Italiano, 1977 (著者寄贈)
43. M. Fantin "Piouieri ed Epigoni Italiani sulle vette di ogni continente" Club Alpino Italiano, 1975 (著者寄贈)
44. J. Hunt "My Favourite Mountaineering Stories" Lutterworth Press (版元寄贈)
45. S. Walcher "Bergsteigen—Festschrift des Österreichischen Alpenklubs zu seiner 100 J. Feier 1878—1978" Österreichischen Alpenklub 1979 (福田宏年氏寄贈)
46. "Unsere Landeskarten" Schweizer Alpen-Club, 1979 (Dr. Arnold Gubler 寄贈)
47. Walter Kargel "Alpine Anstiege der Kappaten" 1979 (著者寄贈)

関西支部、図書に関する小史

関西支部図書委員 村井 葵

" " 杉本 秋之介

昭和 10 年 JAC 関西支部設立 (9 月 10 日)、ルームを大阪貯蓄銀行ビル 3 階 8 号室に開設。支部図書室が支部存在の強力な裏打ちをなすものとしてルームが誕生した。

寄贈図書 Die Alpen Vol. 1932 (中田伸直氏) 支部ルーム開室とともに、図書、文献、部報類が自然に集まり、図書を翻いていく人は相当多かった。

昭和 11 年 6 月 1 日～30 日 藤木九三氏ヒマラヤ関係蔵書の特別展覧会 (支部ルーム)。利用者多く好評で 7 月 31 日迄会期延長

6 月 19 日 ヒマラヤ文献解説の夕 (宮崎武夫氏解説)、これにより関西のヒマラヤ研究熱高まる。洋書 64 冊 和書 5 冊

9 月 1 日 三木高峯氏蔵書、アルパイン・ジャーナル創刊より現在迄、高橋健治氏よりドイツ山岳会々報一揃、奥貞雄氏よりフランス山岳会々報一揃をルーム書架に無期限拝借、会員の利用に供した。支部備付の購入図書については加納一郎、高橋武夫両氏が之に当たった。

次のものを丸善より取寄せた。

- 地学雑誌
- 地理学
- 信濃毎日
- Geographical Journal (E)
- Geographische Zeitschrift (G)
- National Geographical Magazine (A)
- Die Alpen (S)
- Geographical Review (A)
- Deutsche Alpine Zeitung (G)
- Alpine Journal (E)
- Der Winter (G)
- Himalayan Journal (I)
- La Montagne (F)
- American Alpine Journal (A)
- British Ski Year Book (E)
- London Times (Weekly Edition)
- Zeitschrift der Deutsch-Osterreich Alpen Verein (S)

(以下次号)

あとがき おめで
とうございます。

'80年代が始まりま
した。私の受け取
った賀状の中に、

この'80年代に私は
定年をむかえると
いうのがありますし

た。その人にとっ
ては一つの結着を
つけるべきこの年

代、イタリア映画
の「ミラノの奇蹟」
ではありませんが

「一九八〇年代が
貴方にとって本当
によい年代であり

ますように」と念
じながら「おめでと
うございます」

といいたい気持です。
いよいよ本年4月末には
チョモランマ計画も大詰
です。ともすると内
外から誤解を受けそ
うな山登りをする登
山家たちのためにも
、日本山岳会のチョ
モランマ成功を世界
中に知らせ得るよう
願います。

昭和五十五年一月二十日発行
102 東京都千代田区四番町五―四
サンビュウハイム四番町

発行所 社団法人 日本山岳会
西堀栄三郎

編集代表 岡 沢 祐 吉
電話東京(03)四四三三
三三三

振替口座東京三―四八二九番
東京都港区赤坂一丁目三番六号

印刷所 株式会社 技 報 堂